T・S・エリオットのロレンス批評

高城楢秀

I

文芸批評に道徳批評の色あいがくわわると、その批評はえてしてつまらなくなるものである。ただしなにごとにも例外はあるらしい。T・S・エリオットがロレンスを批評したとき、彼の立場は道徳批評に近寄つていたにもかかわらず、彼のロレンス批評はかなり読みごたえがあつた。

もつとも、はじめに一寸、僕は誤解されないように断つておかねばならない。エリオットがロレンスを批評したといつても、彼がロレンスをそう度々批評しているわけではないのだ。彼がいままでにロレンスを批評したのは、わずか二度きりであつたとおもう。一度は「異神を追いて」のなかで、もう一度は、一九五一年に出版されたウィリアム・チェイスト ンの「D・H・ロレンスと人間的存在」という本につけた短い序文においてであつた。

このようにエリオットがロレンスに示した関心はごく僅かなのである。しかも、その数少い批評が、ハックスレイやマリーやオールディントンのロレンス批評にくらべると、じつに道徳的な臭気のふんぷんとした、否定的な批評である。僕のような文学青年からみれば、エリオットほどの教養のひろい、文学的センスの豊かな批評家がロレンスの文学をなぜあれほど道学者然として批評し否定したのか、不思議なくらいである。

しかし、エリオットのロレンス批評は、なおそれでも読みごたえがあつた。では、何故僕にエリオットの批評が面白かつたのか。答を簡単にいつてしまえば、僕には、エリオットほどの批評家がロレンスという天才的な作家と出会つて、なぜかしらぬが苛立ちヒステリックになつている、その姿と、その事情が面白いのである。

さらにいえば、文芸批評家エリオットが道徳批評というス

タイルに頼つて、ロレンスの文学を批評した姿が面白いともいえるのである。

エリオットは「異神を追いて」でいう。――「ここで注意しておきたいことがある。ロレンスの作品にみられるあらゆる男女関係において、私をひどく驚かせたことなのだが、そこに倫理的な社会的な感覚がないということである。私のいうのは、作家が、オリンパスの神々のように高い丘のうえで我不関焉といばつた態度をとり、作中人物にたいしてまるで道徳的な考慮を払おうとしないという意味ではない。そういう態度は偉大な芸術家にありがちだと言われるのだが、私にはその意味がよく分らない。私のいうのは、作中人物があきらかに人間であると認められるにもかかわらず、すこしも道徳的な義務への心遣いや自覚も示さず、ごく世間なみの良心すら持ちあわせていないということなのである。」

ひどい批評だ、これではチャタレイ裁判の検事そこのけの批評ではないか。エリオットのいうところにしたがえば、ロレンスの文学は発禁されるべきであるかもしれない。

しかし、僕のようなロレンスを愛する者にとつて幸福なことに、今日のロレンス批評の常識はエリオットの批評とまつたく反対の方向にある。誰も（すくなくともロレンスの文学を認める人なら）、ロレンスを無道徳な男だとみなしてもいないし、彼の作中人物を道徳的義務感も良心もない人間であるとも考えていない。若いポール・モレルもアーシュラもチャタレイ夫人も、エリオットのいうように無道徳きわまる人物ではないはずだ。

例をポール・モレルにとつてみよう。ロレンスの青春の自伝的分身であるポールは無道徳な青年であつたか？　僕は彼が無道徳な良心のない青年だとはけつして考えない。いや、彼は無道徳どころか、こころの奥底において非常に強烈な倫理感を持つていて、彼のまわりにいる道徳堅固な大人たちが道徳の美名にかくれて無意識のうちに演じていた偽善のからくりを、はっきり見抜いていたのである。

ポールの母親は宗教心の篤いまじめな女である。彼女はキングス・イングリッシュで話し、図書館の本を読み、厳格な宗教心から毎週教会に出席し、いつも黒、白、灰色の着物以外を着なかつた。だが、彼女のこうした道徳心は、生得のものであるとともに、彼女が夫婦生活において満すことのできなかつた欲望を抑圧し、捩じまげる作用をする一種の装置であつた。しかし彼女はこれに気づいていない。彼女は自分が道徳的な女であるという自信をもつていて、息子にむかつて自分の信じている道徳を押しつけていく。もちろんポールの母親は、自分の満たされない欲望が、讃美歌や、図書館の本や、地味な服装によつて昇華されるとおもいこそすれ、それがこころの奥で、陰惨な顔をした化物のように身を伏せているなどと考えつきもしなかつたのである。

ポールの不幸は、彼が物ごころつきはじめたころから、母親の道徳的な生活になぜかしらぬが偽善のにおいの漂つているのを直観しだしたことであつた。彼はまじめな母親の愛情

を重荷に感じ、それを悩み、また疑う。そして、彼は、母親のもつとも憎み卑しんでいる性的に無道徳な態度をもつて、彼女の古くさい、頑固な、それでいて人間の欲望をことごとく抑圧して、手に負えない悲惨なものにしてしまう大人の道徳に反抗していくのである。

ポールのこうした青春のあがきは、初恋の女ミリアムの愛情にふれたときもあらわれ、母親のときとおなじく無道徳な態度で女性の愛情にこたえている。彼は、体を許したミリアムが結婚をせまつても、ミリアムの望むような道徳的な恋愛のコースを認めず、遠い夜の闇から呼びかけてくる声にしたがつて、ミリアムを捨ててゆく。

しかしながら、ポールが母親を悲しませたとき彼がいかに苦しんだか、ミリアムと別れて心の暗闇のなかをどのように彷徨つたかを、僕たちは忘れてはならない。彼はたしかに古い道徳に反抗する青年であつたけれども、世の中のいわゆる反逆児のように、反逆と叫んで反逆する自分に甘えて寄りかかつているのではない。ポールは、いわば、やむをえず母親に反抗し、初恋の女を捨てるのであつて、旧道徳にさからうことによつて良心は傷つき、苦しみ悩むのである。一見無道徳にみえるポールの青春の行為も、そのじつは、倫理感のあまりに鋭い青年にのみ許されるあの放蕩に似た、社会の通俗的な道徳の壁にいどむ良心のあせりであつたのだ。

II

僕はいま、エリオットの道学者然としたロレンス批評に反駁して、今日のロレンス批評の常識のうえにたち、ロレンスがけつして無道徳な作家ではないといつた。僕は自分のロレンス観を正しいとおもつている。だが、エリオットの言分もまたある点では正しいような気もするのである。なるほど、ロレンスの作中人物は、ポールの場合においても分るように無道徳どころか、こころの奥底で強烈な倫理感を持つていたことに間違いはない。しかし、そうだからといつて、そのことと、彼等作中人物が古い道徳の廃墟のむこうに新しい道徳をみたかどうかということは、まつたくディファレントである。彼等がなにをもとめて世俗に反抗し、そのために苦しみ悩んだにせよ、そのなかには、作中人物自身が発見して、じつくりと消化し、肉づけしてみせてくれないかぎり、作者ロレンス以外の者の眼にはなかなか分らないものである。

それにしても、エリオットほどの批評家がロレンスにむかつて、どうしてあれほど奇妙に苛立つてヒステリックな否定の言葉を語つているのだろうか。

あるいはと僕は推測するが、エリオットがロレンスを頭ごなしに否定しようとする態度のうらには、彼がロレンスの文学になにか恐ろしいものを感じていたのではなかろうかとも考えられる。もちろん、彼がロレンスを恐れていたとしても、彼はロレンスを個人的に毛嫌いしていたのではないとおもう。ティヴァトンの序文でもいつているように、彼は生前ロレンスと面識がなかつたらしい。もし会つていれば、ロレ

ンスに一つぐらい嚙みつかれていたかもしれないけれども、会つていないのでは個人的に嫌いようがない。また、彼がロレンスの小説を読んで、ロレンスを虫の好かない男だとおもうようになつたと想像できないこともないが、これも彼のロレンス批評を丁寧に読んでみると、そうとは受けとりがたいのである。

たぶん、彼がロレンスをはげしく否定したのは、個人的な印象とか、読書感といつたような生易しいものとは違つた、他の深い事情によるのであろう。

エリオットは第一次大戦後「荒地」を書いて詩人としての地位をつくつた。彼は「荒地」で現代文明の荒廃した風景を見事にうたつている。そしてすでにその当時から、キリスト教的な正統主義を自分の思想の中心におき、神の栄光を讃え原罪による亡びの意味をしることを善悪の基準として考えるようになつていた。「異神を追いて」は周知のように、一九三四年にでた彼のすぐれた評論である。この評論において、彼は「荒地」にうたつた思想を宗教的、倫理的な立場から普遍化して、神なき世界を低徊している現代の様々な精神を理論的に否定しようとした。

だが、エリオット個人の思想が時代の流れにどれほど抵抗しうるであろうか。そのころ、ヨーロッパの思想界はようやくナチスの暴力に戦うヒューマニストやコミュニストたちの荒々しい闘争によつて混乱しようとしていた。ちようどそのような時代に、彼がキリスト教的正統主義を足場として、ヨーロッパ精神の伝統がここにあつて、現代文学の可能性は神を信じることによつて人間の精神の真の価値を認識し、原罪による亡びの必要をしることからはじまるのだと説いてみても、なにほどのことがあつただろうか。自然、「異神を追いて」において、エリオットは昔の護教論者のように声高くなり、近代の異端をしりぞけるにあたつて厳格な非寛容の態度をもつて臨むようになつてきたのも、訳ないことではない。

これは僕の意見にすぎないけれども、「異神を追いて」はすぐれた評論であるが、この本を書いたころのエリオットの精神は、批評家の精神というよりは、むしろ護教論者か神学的イデオローグのそれに近かつたのではないかとおもつている。

こんなときに、彼はロレンスを批評して、近代の異端者の一人、つまり現代精神の堕落を象徴する生きた証拠として酷評したのであつた。そして、最初に断つておいたように、彼がロレンスを批評したのはわずか二度きりであつて、しかもその主なものは「異神を追いて」にあつまつている。

このへんの事情を考えれば、何故エリオットがロレンスの文学を、文芸批評的にではなしに道徳批評のスタイルで、頭ごなしにやっつけたか、その理由がなんとなく漠然と分つてくるような気がするのである。

しかし、それはそれとして、エリオットがロレンスの文学に出会つて、なぜあれほど苛立ち、ヒステリックになつたのだろうかという問いにたいして、たんに僕がいま答えたよう

なことで説明し尽くせるものだろうか。「異神を追いて」において、エリオットが時代の流れに対抗して闘志をわきたたせるために、肩をはつて身を硬くし、護教論者か神学的イデオローグのごとく、宗教的、倫理的な筆先で文学作品を一刀両断に批評しさろうと構えたからだというだけで、果して済まされうるであろうか。

Ⅲ

エリオットは「異神を追いて」でいう。

「要するに、ロレンスは伝統とか習慣とかに煩わされないでまつたく自由に人生に進出してきた。彼にはおのれの心の光のほかには自分を導いてくれるものがない——ところが、心の光というものは、彷徨える人類に与えられたもつとも当にならない、間違いを起し易い案内者なのである。このことはロレンスの場合にはとくに目立つている。彼には火花のようなごく短い瞬間以外には自己批判の能力が具わつているようには見えない。平凡な世間的な意味の敏捷さといつた程度の自己批判力すら彼にはない。神の声といつたものについては、それは持つてみれば誰にでもおそらく分るのだろうと言えるかもしれないが、持つていないのに持つている風に考え易いともいえる。また神の声が聞えたとしても日常の場合には人は瞬間的に受けとつた神の声から誤つた結論を引出すこともある。つまりは、人間は自分のインスピレーションが何処から来たかということについての唯一無二の判断者だというわけにはゆかない。それでロレンスのように鋭い感受性と激しい偏見や情熱を持つていて、知的、社会的訓練の缺けている人は、善の陣営あるいは悪の陣営につかわれる道具となるには大いに適している——あるいは一部分善、一部分悪のための道具になるには適当であるとも考えられる。」

この一節を読んで、僕は、エリオットのロレンス批評が一面においてロレンスの文学の本質に達していながら、他面においてロレンスが一生かかつて追求したものをミスしてしまつたと考えている。

エリオットのいうように、ロレンスはたしかにおのれの心の光に導かれて歩んだ作家である。彼の有名なエピソードの一つにこのようなのがある。あるとき、ハックスレイと科学上のある問題について議論していた。ハックスレイは、いつもロレンスが科学を軽視して、極端に不合理な言い方で科学に敵意ある言葉をはく態度に腹を立てていたので、実験的にあきらかに証明された事実を並べて、「しかし証拠を見給え」と詰めよつた。それに答えて、いままで「科学者の嘘つきども！」と罵つていたロレンスは、いかにも彼らしい答え方をした。「だが、僕は証拠など気にしない。証拠などなんの意味もない。僕はここに証拠を感じていないのだからね」といつて、彼は自分のみぞおちのしたを押えたのであつた。

これはエピソードであるが、ロレンスは我の強い男であつて、彼は自分が信じるもののみを信じ、自分が善と考えるもののみを善だと考えるような傾向をもつていた。彼は神を信

じたいとおもつていたかもしれないけれども、彼は教会の教える神の道を信じなかつたし、科学上の結論も自分がわからないことはめつたに認めようとはしなかつたのである。

エリオットのいうように、ロレンスはエゴイストであつた。彼の文学もまたエゴイストの文学である。彼の青春の自伝的な分身であるポールもエゴイストであり、アーシュラもそうである。彼等は自分にとつて切実なものにたいして忠実であつた。偽善をはじめとして、人生の偽われる様々な外観に気を奪われることのない人物であつて、彼等は二十世紀初頭の英国の風俗や習慣になじまず、彼等が真実におもうもののために、戦い、傷つき、破れるのである。彼等には、まわりに住んでいる知識人、中産階級人が、贋物、幽霊、生命喪失者の群れにみえたのである。こころの空虚な、自意識過剰の人々。男はくすぐりやのぞきを喜び、性感覚は倒錯していて、知識を社交の飾りにつかい、女をしやれた人形扱いにし、社交的で、身なりに隙がなく、神経のさきで恋愛し、客間で社会主義を語つて自分たちの良心を信じている。女はそのような男を尊敬し、満足し、競馬場や劇場や画廊にゆくことを誇りにして、交際してはならない人間や口にしてはならない言葉をよくしつていて、社交界のタブウに敏感である。

僕は、エリオットがロレンスの文学の本質をこれらの生命を喪失した贋物との戦いにあることを認めた言葉を正しいとおもつている。ロレンスはたしかに心の光に頼つて、自分の信じるものを信じ、自分の眼でみたものをみたと言い得る天才であつた。

だが一面、ロレンスはその心の光、あるいはエゴイズムにつまづき、苦しみ、それを面倒なものだと考え、感じたのでもあつた。彼の思想は性の解放の思想としばしば誤つて混同されるが、しかし彼の理想とした世界は人類の全人的な完全燃焼の可能な世界であり、たんなる性慾、官能の礼讃ではない。彼は紳士淑女のお上品な風俗に突きあたつたけれども、他方では、情痴や人間の動物的慾望を頽廃した野蛮な行為だと卑しんでいた。ロレンスの思想は生命主義的な色彩の濃いものであつて、彼の追求していたものは、性のための性の讃美でなく、たまたま当時の人々の精神主義的な偽善の風潮が精神的なものを尊敬するあまり肉体を抑圧していた傾向に反対して、人間の条件としての肉体的性本能の地位を回復しようとしただけであり、彼のもとめるものは生命が全人的に燃焼しうる世界を探し出すことにあつた。

一言でいえば、ロレンスはエゴイズムから出発してエゴイズムを克服して超越しようとしたのである。自分自身のエゴを完全に燃焼させるとともに、他者のエゴもまた完全に燃えあがらせ、そして白熱するエゴとエゴとの交わりをもつて人間の本当のソリダリティを獲得しようとする思想をもつていたのである。

なるほど、エリオットのいうように、ロレンスは心の光に頼つたエゴイストであつた。しかし、エリオットはロレンスがその心の光につまづいていたのを果して知つていたのであ

ろうか。そしてまたそれを乗り越そうとしていたのを知っていただろうか。エリオットはロレンスを心の光にのみ導かれていた男、鋭い感受性と情熱はもつているが、偏見の多い、知的社会的訓練をうけていない男だと批評するけれども、彼は、ロレンス自身がそのような自分を克服しようとして、いかなる努力を重ねてどのような作品を書いたか、知らなかつたのではなかろうか。

ついでにいつておくが、僕はロレンスの追求したものが人間の裸体の乱舞しているような世界の姿だとはおもつていない。彼の小説において、彼のエゴイズムは性を契機としていろいろな方向へ進んでゆくのである。あるときは裸体の踊りになるときもある。また男女の交わりになるときもある。そして男と男のレスリングのようなことになるときもある。だが、彼のエゴイズムが、エリオットのいう伝統の方向へむかうときもあることを忘れてはならない。キリスト教の神の方へ、ヨーロッパの美的伝統の方へ指向してゆくときもあるのだ。

「虹」のなかで、アーシュラがルーアンの伽藍の美しさにうたれて、恋人アントンとの交渉に空しさを感じる一節がある。

「古い市街、伽藍、歴史の古さ、遺跡のような静けさが、彼女のこころを彼から引き離してしまつたのだ。そうしたものに対して、彼女の心は、強く求めながらつい忘れていたものに対してのように、たちまち烈しく惹かれていつた。いまやそれが、――無常もしらず、否定の声もきかず、泰然として眠つているこの巨大な石造の伽藍が、まさにこれこそ真実の実在であつた。そのゆるぎなき安定さ、そのすばらしい絶対さにおいて、驚歎すべきものであつた。」

断るまでもないことだろうが、これはロレンスの小説中の言葉であつて、キリスト教者エリオットの作品から引用したのではない。

さきにも述べたように、エリオットがロレンスを批評して彼を伝統をしらないでまつたく自由に人生に生れてきた作家であるといつたのは、一面の真理を物語つているが、他面において、ロレンスの追求したものをミスしているといえるであろう。

Ⅳ

エリオットはロレンスを批評するとき不思議なほど苛立つている。すくなくとも「異神を追いて」では、彼はロレンスに出会つて、身を硬くし、肩を張つて、ロレンスを頭ごなしに否定しようとしている。

それにたいして、僕はエリオットがロレンスの文学のなにものかに恐れをいだいてたじろいているのではないかと、推測した。あるいは、僕の推測は、僕の身勝手な独りよがりな見方だといわれるかもしれないけれども、僕には、そう考えることが、ともかくエリオットのロレンス批評を読みごたえのあるものにさせていることは否めないのである。

では、エリオットがロレンスのなにを恐れていたのだろうか。

――結論をさきにいつてしまえば、エリオットが、ロレンスという作家のあくまで小説のなかでものを考えてゆく作家的態度に幾分ともたじろいたのではないかと、僕は推測している。このことは、「文芸批評論集」その他ですぐれた文学批評を書いたエリオットには当らないかもしれないが、すくなくとも「異神を追いて」を書いた当時の彼については言いうるのではないだろうか。

ロレンスは現代の神話の創造者の一人であり、性の哲学者であり、原始的生命の有難さを鼓吹する予言者であるといわれてきた。だが、彼の本質は、彼の小説家としての才能にあり、それも天才的な才能にあつた。ロレンス研究家として有名なオールディントンも力説しているように、彼は、なにはともあれ偉大な文学的芸術家であつて、非常にデリケートで情熱的な感受性を持ち、そしてその感受性が同時代の他のいかなる作家も持つていなかつたような、雄弁な文体と、生き生きとして迫真的な言葉にたいする先天的な力とに結びついていたのである。それに、彼には小説を書く人になくてはならない物語を構成する力と、作中人物を造型する力に恵まれていた。

ロレンスにはたしかに、メシヤ的側面と文学的側面とがあり、しかもこの二つがしばしば相戦つていたのである。不幸なことに、彼の在世中から彼の死につづく十年ほどのあいだは、多くの批評家たちは誤つて彼のメシヤ的側面に気を奪われていた。もつともそれも無理ないことである。彼の一生は現代の予言者めいた、世俗にたいする反抗と逃亡の旅の連続であつたからだ。そして、彼は自分の小説のなかに、自分の反逆の精神を体現する人物を登場させて、彼等作中人物に自分の理想を追求させて、悩み苦しませ、また破滅へと導いたのである。

たとえば、ロレンスの親友の一人であるジョン・ミドルトン・マリーなどは、「女性の息子」（一九三一年）という題のロレンス論を書いた彼の理解者であつた。そのマリーでさえが、「形式とか、その他、芸術に必要であると考えられているものがロレンスに欠けているといつて、彼を非難することは、まつたく見当はずれの批評である。芸術というものは彼の目的でなかつた。」というような間違つた辯護をしているのである。

しかし、オールディントンの解釈のほうがマリーよりもはるかに現代的であり、ロレンスの本質をより正確に語つている。いまでは、ロレンスを語る人は、彼のメシヤ的側面が彼の文学にプラスするよりはマイナスの作用をなしていると考えるようになつているのだ。

繰返えしていうようだが、僕はやはり、エリオットがロレンスのこの作家的な才能、いいかえれば、小説のなかでものをじつくりと考えてゆく能力に気おくれを感じたのではなかろうかと考えたい。「異神を追いて」を書いたとき、彼はキ

リスト教的正統主義を主張して、神のない、いや神をも恐れぬ現代の精神を宗教的、倫理的な立場から理論的に懲伏せしめようと試みた。彼は護教論者の筆法で正邪の区別をあきらかにし、善悪のなにものであるかを説き、現代人の精神の空のなかの空のごとき様を揶揄し、罵倒し、軽蔑したのであつた。

だが、そのとき、エリオットの批評精神にゆとりのなかつたことについてはさきにもいつたとおりである。それをさらにうがつていえば、彼ほどの文学的センスの豊かな批評家が「異神を追いて」のような道学者的な批評を書けば、彼のこころのそこに空しく苛立つ心理の波が無意識のうちに漣みだつてはいなかつただろうか。

エリオットにかぎらないけれども、自分の思想を確立しようとする批評家は、はじめに自分の思想を純粋な形でとらまえようとする。そして一切の妥協を許さないものである。それからおもむろに、自分の思想をいろいろの角度から検討したあげく、まず現在の自分にとつて切実な点からそれを消化し、肉づけていく。やがて自分の思想を社会にむかつて話しかけてゆくときがくるが、そうしようとするためには、じつに長い時間をかけて努力をかさねなければならない。多岐にわたる表現を学び、微妙なニュアンスの差をかぎわけ、平明化し一般化し、また中心を力説し、具体化し、自分の思想の独自性を示し、誇張し、謙遜したりする。

ことに文芸批評家の場合はこのことがさらに複雑になる。彼は自分の思想も大切であるが、批評する対象のもつ美しさや内容や性質が働きかけてくるものを素直に理解して、対象のもつ、ひだや曲折に柔軟に密着していかなければならないだろう。自分自身の生々しい思想と、批評の対象としてとりあげた作品のテーマや作中人物の性格や心理や情念の互にからみあう姿を凝視する眼とを、まじめに調節させることは難しい仕事である。

エリオットがロレンスを批評したとき、彼は自分の思想を確立したばかりであつた。「荒地」は現代精神の荒癈をうたうのに巧みであつたけれども、彼の思想を強くうちだして表現するには、まだそのテーマも表現もそれほど練れてはいないようであつた。僕などのみるところでは、彼の思想が確立したのはこの「異神を追いて」を書いたころだとおもつている。

それにまた、彼の思想の中心はキリスト教的正統主義である。これは本来宗教的、倫理的な思想であつて、これを現代文学の場で文芸批評の言葉に変形することは、それこそ長い時間をかけて研究したあげく、新しい角度から新しい言葉で語るために四苦八苦しなければならない種類の思想である。

だから、僕は「異神を追いて」において、彼がロレンスを批評をする際、自分の生々しい思想を前面に押しだしてロレンスの文学を否定しようとし、道徳批評のスタイルを借りてロレンスを酷評したとしても、止むを得ないことであるとおもつている。だが、彼が道徳批評を借りねばならなかつたそ

の心境には、よしんばそれが彼にとつて自分の思想を表現する確実で手近な方法であつたとしても、かならずしも安らかな気持で批評したとはおもえない節があるようだ。
それとも、僕が勝手気儘な妄想にふけり、まことしやかにうがつたことをいつて嬉しがつているのだろうか。
あるいは、そうかもしれない。

V

「異神を追いて」にくらべると、ティヴァトンの序文のほうはかなり道徳批評の臭気が抜けているが、これはごく短いもので、それに他人の本の序文であるから大して内容のあるものではない。批評の要点は両者とも大体同じであつて、ロレンスは直観的に心の光で真理をみたかもしれないが、彼は伝統のなにものであるかをしらない男であり、知的、社会的訓練にかけているので、彼の書いた小説は堕落した人間像しか書けていないという。ただ、ティヴァトンのほうでは、ロレンスが根本的には宗教的な作家だつたようで、絶対的な神を求めていたらしいといつた、いかにもエリオットの好きそうな言葉をつけくわえているところは寛容である。
だが、ティヴァトンの本の序文は短かすぎるから、僕はここにわざわざ取りあげてみて語る気にはなれない。
話を「異神を追いて」に戻して、エリオットのロレンス批評が奇妙に苛立ち、ヒステリックになつている例を二、三書いておこう。

「ロレンス自身の言葉から考えてみても、あのわけのわからない讃美歌をうたう信心深かそうな態度ほど恐ろしいものはあるまい。この信心深そうな態度は、ロレンスの母親の悲しい境遇を慰めるものとなつたらしいが、その子供の行いを躾けるためのしつかりした倫理を彼女に与えなかつた。」
これは「息子と恋人」のポールの母子関係に関する批評である。批評の筆先がすこしズレているようだ。
「ロレンスの作品は、分別のある人々を動かすのではなくて、病的に虚弱で混乱した人々を動かす。それもそういう人々に残つている健康な点に訴えるのではなくて、病的な点に訴えるのだと私はおもう。」
「私は『チャタレイ夫人の恋人』のなかに、初期の作品より進歩したものがあるとはおもわない。お馴染みの猟場番人がまたあらわれる。社会的な強迫観念から、良家の子女あるいはこれに近い身分の婦人が自分の身を下層の者の用に供したり、その反対に下層の者を弄んだりすることは、他の作品で、女性の人物が野蛮人に身を任せたりする病的な不健全さと源を一にする。この書物の作者は私にはじつに病的な人間にみえる。」等々である。
これなどは、ひどいものである。いつたいエリオットは既に死んだロレンスに言いがかりをつける気なのだろうか。それとも、彼に嫌なブルジョワ根性でもあるのだろうか、そしてまた白人優越の意識でもあるのだろうかと疑いたくなる。
僕には、良家の子女が下層の者と恋愛するのがなぜ悪いの

か、白人の女が顔色の違う男子と結婚してなぜ悪いのか、さっぱり分らないのである。

それはともかくとして、ここで一つ僕はエリオット対ロレンスの関係について注釈をいれておきたいことがある。ある批評家が他のある作家を批評する場合、二人がまつたく別の違つた世界に属していて、相手の作家を否定するときと、二人が共通の敵をもちながらもしかも、相手の結論を認めることのできないときとがある。エリオットのロレンス批評は後者のほうであり、二人の文学精神や倫理観や生活感覚が相容れなかつたといつても、エリオットがロレンスを自分とはまつたく別天地に住む作家として、彼を観念的に批評して切り捨てているのではない。

エリオットの敵はまたロレンスの敵でもあつたのだ。エリオットの「荒地」から「四つの四重奏」にいたる詩は深遠で難解であり、詩劇「カクテル・パーティ」も読んで楽しいわりに作者の意図の分り易いものではない。また、評論も、彼の伝統論の中心であるキリスト教的正統主義にくると、われわれ日本人は、一応観念的、図式的に理解し得るが、それ以上のことはとても語る資格はなさそうである。だが、彼が物質文明を無邪気に謳歌している現代の大衆や、個人主義万能の物の考え方を手ばなしに信頼している人々の精神を憎悪し、その荒癈した精神風土に挑戦していることは、彼の詩や評論を読んだものなら充分に理解できるところである。

ロレンスの場合は、エリオットよりさらに天才的、個性的であるけれども、彼もエリオットに劣らず現代人の精神を憎んでいるのである。もつともエリオットが現代社会のなかでノーベル賞作家としての名誉をうけてどつしりと立つているのに比較すれば、ロレンスが逃亡者のようにヨーロッパを放浪し、オーストラリアからメキシコまで逃げてゆくその一生は、弱いといえば弱いかもしれない。しかしそれにしても、彼の小説は小説としての価値以外に、現代文明の批評の書としても読まれるべき価値がある。現代への憎悪。ロレンスの文学は生命の純粋な燃焼をもとめる思想と、男女の愛情の葛藤を赤裸々に描写する筆致と、そして現代文明の自己満足にふける顔に投げつけたこのはげしい憎しみとによつて支えられているのである。

エリオットは「異神を追いて」のなかで、次のように言つているが、その言葉は彼とロレンスが互に現代文明という共通の敵をもちながらも、しかもいかにロレンスの文学を認めようとしないかを如実に示している。

「ロレンスは、死にもひとしい現代の物資文明にたいして反抗の言葉を繰返して述べている。……現代世界への批評の書として『無意識の幻想曲』は座右において繰返して読むべき書物である。ノッチンガム、ロンドン、工業化したアメリカに対照して、彼の『メキシコの朝』のなかで跳ねまわる銅色土人は生命を象徴しているようである。いかにもその通りである。しかしそれは結論の言葉でなく、序論の言葉にすぎない。」

エリオットは、現代文明のマテリァリズムにたちむかつてゆく、文明憎悪のこの小説家の姿勢を見事なものであると眺めている。それでいて、ロレンスが戦い破れた果に身につけた人生の哲学は気にくわないと素気ない顔をする。たぶん、序論はわかるが結論は頂きかねるというつもりだろうか。

だが、いまここに引用したロレンス批評あたりが、エリオットのロレンス批評のなかで一番うつくしい批評であるように、僕はおもつている。エリオットがロレンスにたいして苛立ち、ヒステリックになつているのは興味のあることだが、それとともに、エリオットがロレンスと同じ敵を憎悪しているということは、彼のロレンス批評をたしかに読みごたえのある、真実味の豊かなものにしているようである。はじめに僕は、エリオットがロレンスという天才的な作家と出会つて苛立つたその姿と、その事情が面白い、そしてさらにいえば文芸批評家エリオットが道徳批評というスタイルを借りてロレンスを批評した姿が面白いといつたが、いうまでもなく、もちろんエリオットがただ腹を立てている姿が面白いといつたわけではない。このへんのことをふくめて、僕は面白いといつたのである。

批評は、批評する者とされる者とのあいだに、コンジィニュアルな理解が生れてくるにしたがつて、当然それだけ味わいが深くなつてきて読者の胸をうつものである。そしてその両者間の理解が、共通の愛情や憎しみや羨望などから生れてくるときのほうが、理論だつた知的な共感のうえにできあがつているときよりも、なぜかしらぬが批評にぐつと魅力のあるかげりをますもののようである。

〔附　記〕

僕は、T・S・エリオットのロレンス批評について研究した論文をまだ次のものしか見つけていない。もし他によいものがあれば読みたいとおもつている。僕の読んだのは。

F. R. Leavis : *D. H. Lawrence : Novelist* 中の最後の章 (Appendix) の *Mr Eliot and Lawrence* である。もつとも、この本の著者の言つていることは僕の書いたこととはあまり関係がない。因みに、その主旨をいえば、エリオットの主張する伝説とロレンスの環境にあつた英国の中産階級の伝統を比較して、いづれの方が英国人にとつてより伝統的であるかを述べている。エリオットのいう高度のインテリ的、カトリック的伝統論が英国ではやや浮きあがつた理論であり、むしろロレンスの母親のプロテスタントの伝統や、彼が母親から譲り受けたノン・コンフォーミスト的な人生態度のほうがより伝統的であると辯護することからはじめて、エリオットのロレンス批評が酷に過ぎる点をあげて反論している。

（本学文芸学部助教授）